毛呂山歴史散歩 210

流鏑馬サミット参加団体の紹介⑧

萩日吉神社の流鏑馬

（埼玉県ときがわ町・小川町）

流鏑馬には武将伝説が多く伴います。毛呂山町の流鏑馬は源頼義・義家父子が奥州征伐の凱旋時に流鏑馬を奉納したという伝承があります。萩日吉神社（ときがわ町西平）の流鏑馬には、木曽義仲の家臣伝説が伝わっており、これに随って流鏑馬が行われています。今回はときがわ町と小川町で奉納している萩日吉神社の流鏑馬を紹介します。

森の町・ときがわ町、武蔵の小京都・小川町

毛呂山町と同様、外秩父山地の裾野に位置するときがわ町と小川町は埼玉県のほぼ中央に位置しています。ときがわ町は人口約1万3千人、面積55・77平方キロメートルで、町域の68パーセントを山林が占めている森の町です。また、源頼朝の厚い庇護を受けた慈光寺は役小角が修験の道場としたといわれ、最古の写経とされる貞観3年（871）の「大般若経」が伝わる古刹です。近年、ときがわ町では木の学校づくりをテーマに町立小学校を木造に改装する試みも行われています。

小川町は人口約3万4千人、面積60・45平方キロメートル、山地と台地を合わせもち、町の市街地は盆地となっています。小川町には建長5年（1253）、万葉集を研究した仙覚律師の万葉の碑があります。仙覚の著した『万葉集註釈』（文永6年・1269）の奥書には現小川町増尾に比定された「麻師宇郷」でこれを終えたとあり、小川町の歴史の古さを物語っています。また、有名な手漉き和紙は「細川紙」として国の重要無形民俗文化財となっています。

木曽義仲家臣伝説

萩日吉神社の流鏑馬は、ときがわ町の旧明覚郷と小川町の旧大河郷の7苗（氏）から各1頭ずつ、現在の町域を越えて奉納されます。これは宇治川の合戦で敗れ、戦死した木曽義仲の家臣7苗が平郷の坂本家を頼って落ち延びてきたため、坂本家は7苗を明覚郷と大河郷に分かれて住み着くよう忠告し、義仲を祀った山王社（萩日吉神社）に流鏑馬を奉納すること、馬場作りは坂本家が行うことを約束したという伝承に基づいているからです。7苗とは、明覚郷の馬場・市川・荻窪氏の3苗、大河郷の横川・小林・加藤・伊藤氏の4苗です。

萩日吉神社の流鏑馬

萩日吉神社の流鏑馬は、祭りの日の早朝、各所を出発し、かつては馬の行列を作って萩日吉神社までの長い距離を練り歩いたものでした。明覚郷は現在のときがわ町中央部から、大河郷は小川町腰越から宿を出発し、荷物を全て馬の背につけ、徒歩で移動しました。流鏑馬の馬場では、二の馬から一の馬へ、一の馬から二の馬へという順でそれぞれの陣場へ挨拶に行き、朝的と夕的の流鏑馬を行います。夕的は、まず始めにバミセ、そして一の的板に矢を当てて墓目を行ない、その後四方固めを行います。的に矢を射る流鏑馬は「角当て」といわれ、1回目の疾走は一の的、2回目は二の的、3回目は三の的に矢を放ちました。4回目は乗り子が両手を広げて前後に振ったり扇を広げる所作を披露します。最後は走りながらムチを投げ捨てるノッパライを行い、夕的が終わります。

四方に矢を射る四方固め

萩日吉神社の流鏑馬は家が守り、継承する流鏑馬です。昔とは社会情勢が異なり、一族だけで担うには困難な状況が生まれてきています。しかし、そのような厳しい状況のなかでも流鏑馬を支えているのは木曽義仲家臣の自負だといいます。武将伝説が今に息づく中世の歴史豊かな比企地域を代表する流鏑馬といえるのではないでしょうか。

夕的で行われる騎射